

発表資料 <https://qr.paps.jp/hsYj7>

(どちらの二次元コードも同じ資料にアクセスできます)



客観的測定テストBEVIを用いた 全員留学の評価

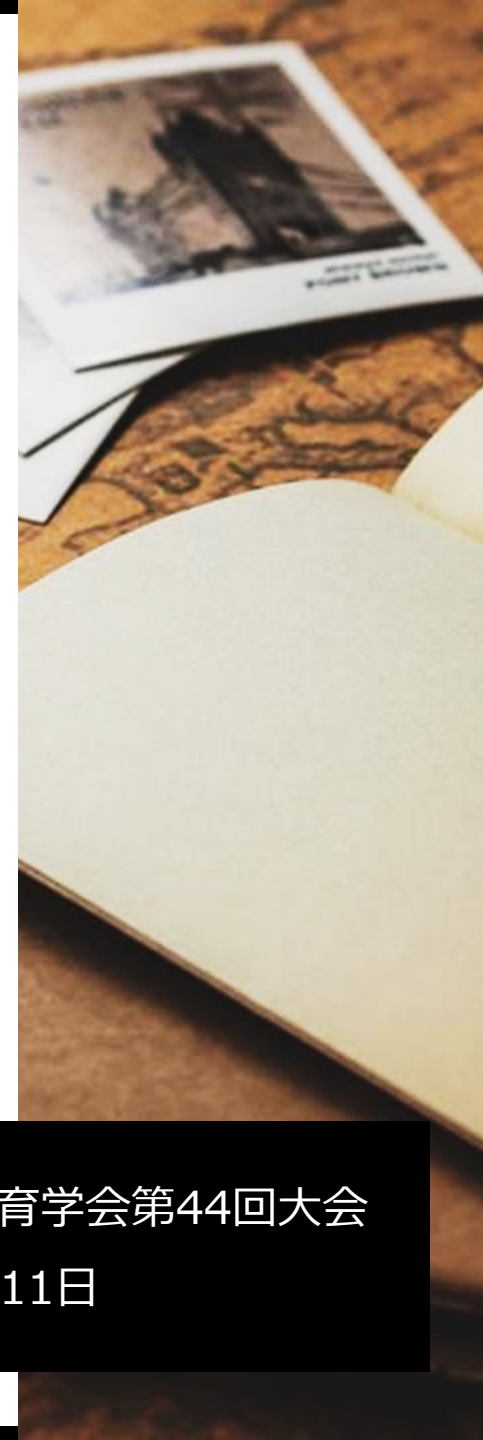
—国際・文化体験への関心が低い学生の留学効果—

千葉大学 中村絵里

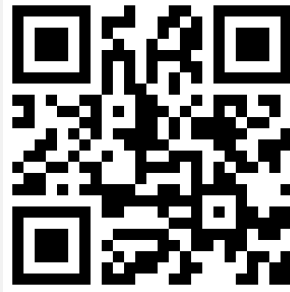
✉ enakamura@chiba-u.jp

異文化間教育学会第44回大会

2023年6月11日



発表資料 <https://qr.paps.jp/hsYj7>
(どちらの二次元コードも同じ資料にアクセスできます)



発表項目

- 1 研究の背景
- 2 客観的評価における理論
- 3 研究方法と課題設定
- 4 BEVIによる分析結果
- 5 考察
- 6 本研究の限界と今後の課題

1 研究の背景

異文化間教育学会
第44回大会

1 研究の背景 日本人学生の海外留学数

□ 2017年度～2019年度

- 毎年10万人超
- 1か月未満の超短期留学が6割以上

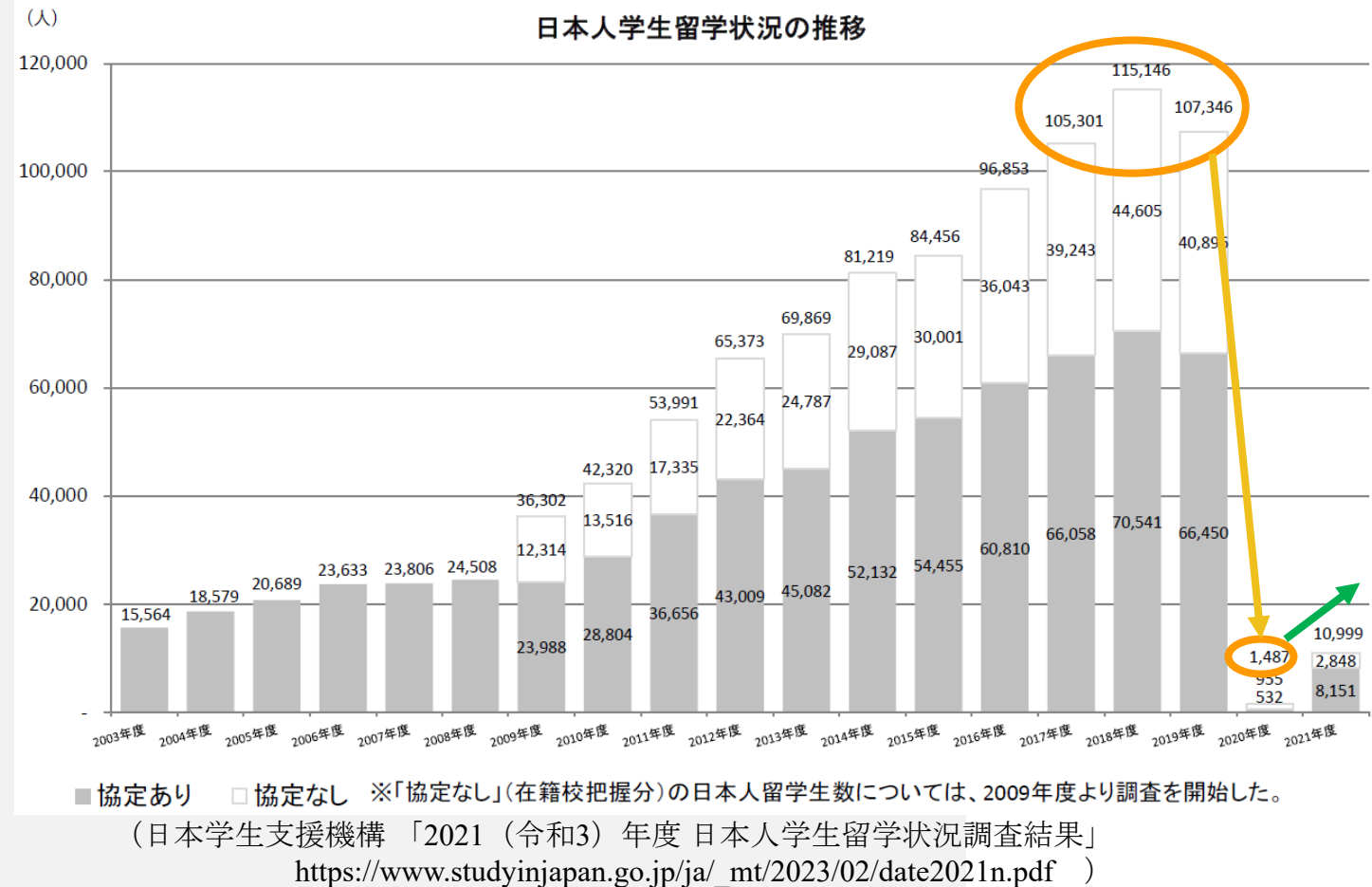
□ 2020年度

- 新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の影響で1,487人に激減
- 超短期留学者数は、わずか16人

□ 2021年度

- 水際対策措置の緩和で10,999人に回復
- 超短期留学者数は
472人（全体の5%未満）

（日本学生支援機構 2023）



⇒ 今後、超短期の海外留学者数が、順調に回復することが見込まれる

1 研究の背景

新たな留学の形態

オンライン留学

- 2020年度以降
- ✓ 在学期間中に学生が選択できる超短期の留学／国際教育プログラムとして需要増
- ✓ たとえば、千葉大学では令和4年度に900名以上の学生がオンライン留学を経験（渡航型留学の代替として）

⇒ 本研究では、渡航型留学に加えて
オンライン留学も日本人学生の
海外留学の一形態と定義づける



1 研究の背景 留学評価・効果に関する先行研究

日本から海外 (outbound) の研究不足

- 受入 (inbound) の研究が多く、派遣 (outbound) の研究が少ない (大西 2019)
- 過去10年間 (2011-2020) の研究論文のうち、受入68%、派遣14% (中村 2021)

CiNii の検索ワード	受入	派遣
「留学」 「評価」	292本	35本
「留学」 「効果」	183本	61本
合計	475本 (68%)	96本 (14%)

(中村 (2021) 「表1:留学の「評価」「効果」に関する先行研究」を基に作成)

1 研究の背景 留学評価・効果に関する先行研究

調査対象・成果指標・評価方法の偏り

- 海外留学経験者への調査

⇒ 海外志向が強い、留学に意欲的な学生

⇒ **セレクションバイアス**

- 語学力の変化が成果指標

⇒ Global Competence (OECD 2018) につながる
コミュニケーション能力、異文化受容などの評価が不十分

- 留学直後の満足度調査

⇒ **留学前後の変容を捉えた客観的評価がほとんどされて
いない**

(大西 2019、西谷 2020、中村 2021)

1 研究の背景

留学評価・効果に関する先行研究

これまでの研究からわかったこと

□学生の主観的評価による調査

- 大学生（国内2大学、n=499）対象の調査
グローバル・コンピテンシーに関わる3つの能力「協働力」「主導力」「遂行力」を確認した
 - オンライン留学プログラム履修者（n=60）対象の調査
プログラム後に「主導力」（リーダーシップ、新規発想、外国人との交流、積極的発信等）の自己評価が上昇したことを確認した
 - 事後の半構造化インタビュー調査（n=9）
海外志向高群・低群ともに、積極性と行動力の向上に寄与する可能性を確認
- （大西ほか 2022、中村ほか 2023）

1 研究の背景 留学評価・効果に関する先行研究

本研究の目的

大学生の1か月未満の超短期留学による
教育的効果を客観的に評価すること

- ✓ Global Competence（OECD 2018）につながる
コミュニケーション能力、異文化受容力等に着目
- ✓ 留学前後で、客観的評価をおこなう
- ✓ 国際・文化体験への関心が多様な学生を対象に調査
- ✓ （関心が高く意欲的な学生から、関心が低い学生まで）
- ✓ 需要が増しているオンライン留学も評価に含める

2 客観的評価における理論

異文化間教育学会
第44回大会

2 客観的評価における理論

グローバル・コンピテンシー

□ Global Competenceとは、
「グローバルな課題や異文化間の状況に適応可能な知識、
スキル、**態度、価値観**で構成される能力（発表者訳）」（OECD 2018）

⇒グローバル・コンピテンシーにつながる
個人の信念や価値観を客観的に測定する必要がある

2 客観的評価における理論

Equilintegration (EI) Theory : EI理論

EI Self (EI自己) モデル

- EI自己は、発達モデル
- 4つの自己で形成される

核自己 (Endoself)

媒介自己 (Mesoself)

殻自己 (Ectoself)

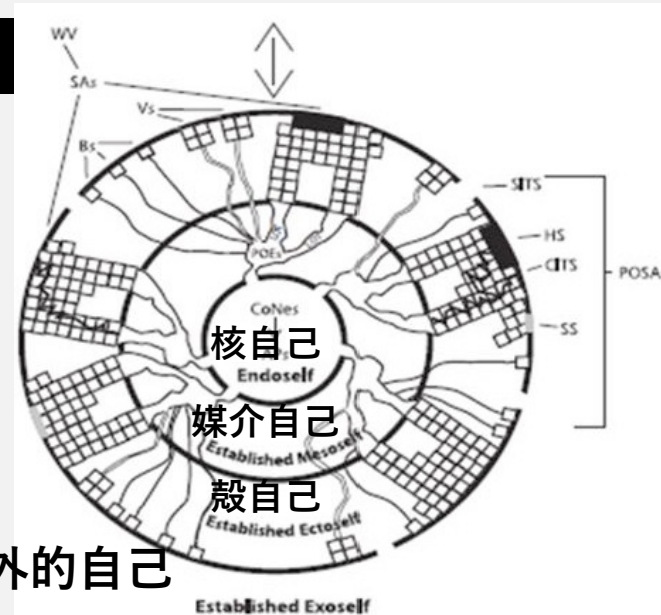
外的自己 (Exoself)

- 最も外側の外的自己は、信念と価値観への外的要因で形成される

外的⇒殻⇒媒介⇒核 その人の世界観が生まれる (永井 2020)

⇒ **留学経験によってEI自己が変容するような自己変容学習 (transformative learning)が生起するか？**

(Shealy 2022)



外的自己

(Shealy 2022より、成人期のEI Self図を抜粋)

3 研究方法と課題設定

異文化間教育学会
第44回大会

3 研究方法と課題設定

調査対象と方法

- 「全員留学」を掲げる千葉大学
- 2021年度から2022年度までに
1か月未満の超短期留学プログラムを履修した学生
- 2021年度のデータは、オンライン留学のみ
- 2022年度のデータは、オンライン留学と渡航留学
- 客観的評価ツールBEVIを、留学プログラムの前後に受検

3 研究方法と課題設定

客観的評価ツールの選定

The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI) とは

- EI理論に基づく設計
- BEVIは、特定の教育活動・特徴的な出来事の前後で、個人の信念・意識・価値観の変容を客観的に測定
- 日本の90以上の大学が利用（2016-2022まで）
- 140か国以上から収集したデータの因子分析
- 17の尺度
- 背景情報の質問と185項目の質問（4件法）

（西谷 2022）

3 研究方法と課題設定

本研究の問い

リサーチクエスチョン：

超短期留学から、transformative learning
(自己変容学習) が生起するか？

サブリサーチクエスチョン：

国際・文化体験への関心が低い学生は、超短期留学によって
どのような学びが起こるのか？

4 BEVIによる分析結果

異文化間教育学会
第44回大会

4 BEVIによる分析結果

3つの尺度の分析

留学や国際体験の効果測定で参照されることが多い3尺度を分析

領域	尺度	説明
他者の理解	15. 社会文化的オープン性	文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである
世界の理解	16. 環境との共鳴	環境/持続可能性の問題に深く関与している 地球/自然界の将来を懸念している
	17. 世界との共鳴	さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している グローバル社会への関与を望んでいる

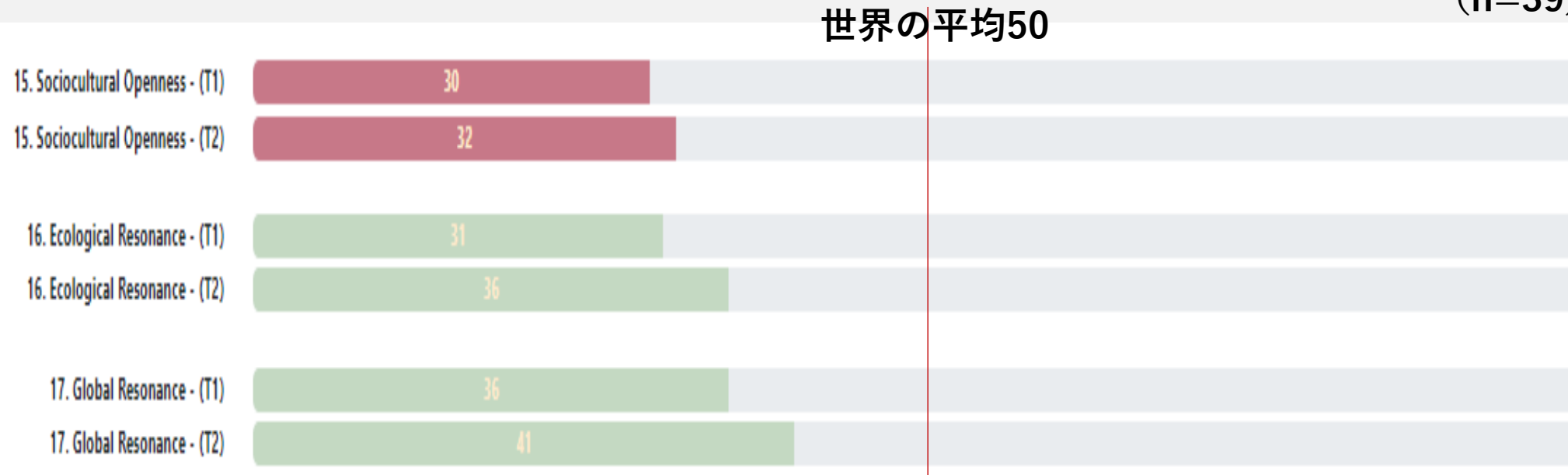
(出所 : BEVIの尺度 <https://jp.thebevi.com/about/scales/>)

4 BEVIによる分析結果

BEVI 平均値との比較

- BEVIでは世界各国からのデータの平均が50に設定されている
- 15. 社会文化的オープン性、16. 環境との共鳴、17.世界との共鳴
いずれも事前（T1）の数値が30～36と平均値より低い
事後（T2）では、3つの尺度いずれも数値が上昇

(n=39)



4 BEVIによる分析結果

データのばらつき

- 十分位数では、17.世界との共鳴の二極化
- 事前（T1）で最も低い層（17.95%）が、事後（T2）に減少（10.26%）
- 事前で最も高い層（15.38%）が、事後に増加（20.51%）

調査対象には、世界への関心が高い層と低い層の二極化が見られる

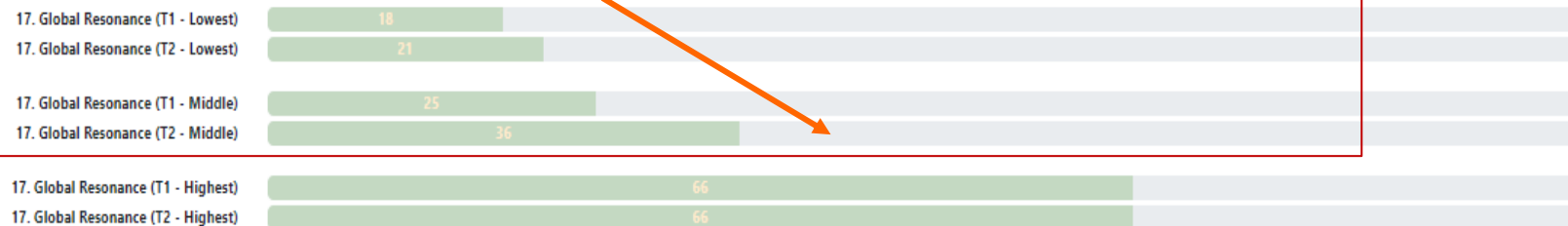
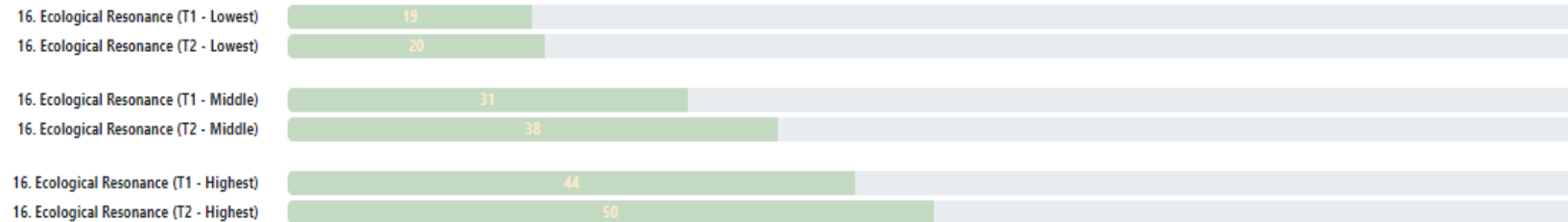
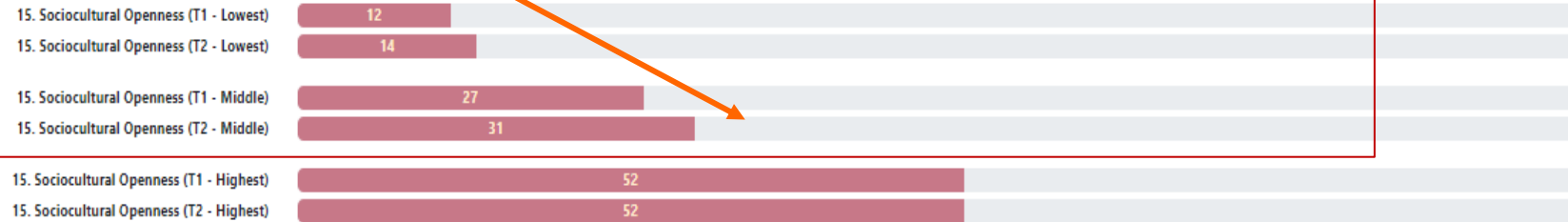
(n=39)

15. Sociocultural Openness (T1)	15.38%	23.08%	15.38%	23.08%	7.69%	5.13%	2.56%	2.56%	2.56%	2.56%
15. Sociocultural Openness (T2)	15.38%	12.82%	20.51%	17.95%	17.95%	5.13%	2.56%	2.56%	2.56%	2.56%
16. Ecological Resonance (T1)	5.13%	20.51%	25.64%	28.21%	2.56%	7.69%	7.69%	0%	2.56%	0%
16. Ecological Resonance (T2)	2.56%	17.95%	23.08%	17.95%	12.82%	12.82%	5.13%	2.56%	5.13%	0%
17. Global Resonance (T1)	17.95%	23.08%	7.69%	15.38%	5.13%	2.56%	10.26%	2.56%	15.38%	0%
17. Global Resonance (T2)	10.26%	28.21%	5.13%	12.82%	5.13%	5.13%	10.26%	2.56%	20.51%	0%
Decile	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

4 BEVIによる分析結果

事前結果が低い層の変容 ① 数値の高群、中群、低群

- 15. 17.の尺度について、低群、中群は、事後の上昇が顕著
 - 15. 17.の尺度について、高群は、事後にほとんど変化がない
- (n=39)

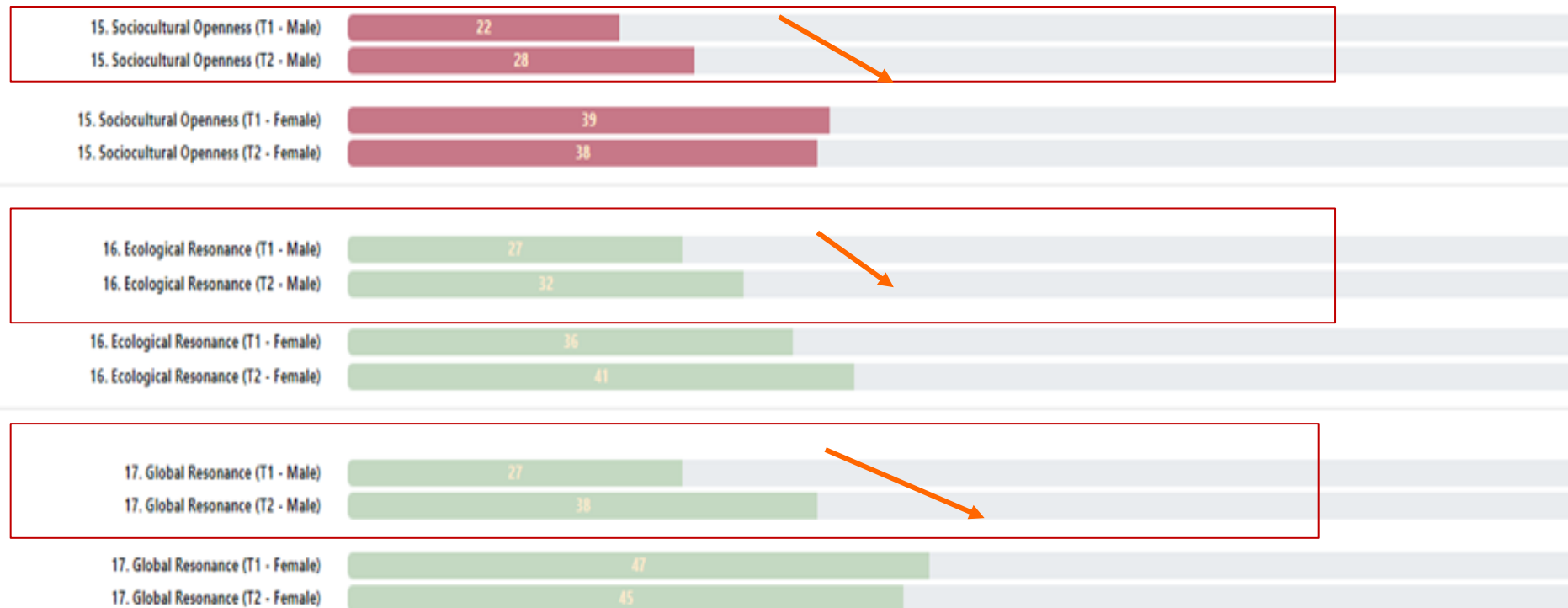


4 BEVIによる分析結果

事前結果が低い層の変容 ②ジェンダー別

- 事前も事後も、上段（Male：男子学生）の方が、いずれの尺度も数値が低い
- 事前に低かった男子学生の方が、事後の伸びが大きい

(n=39)

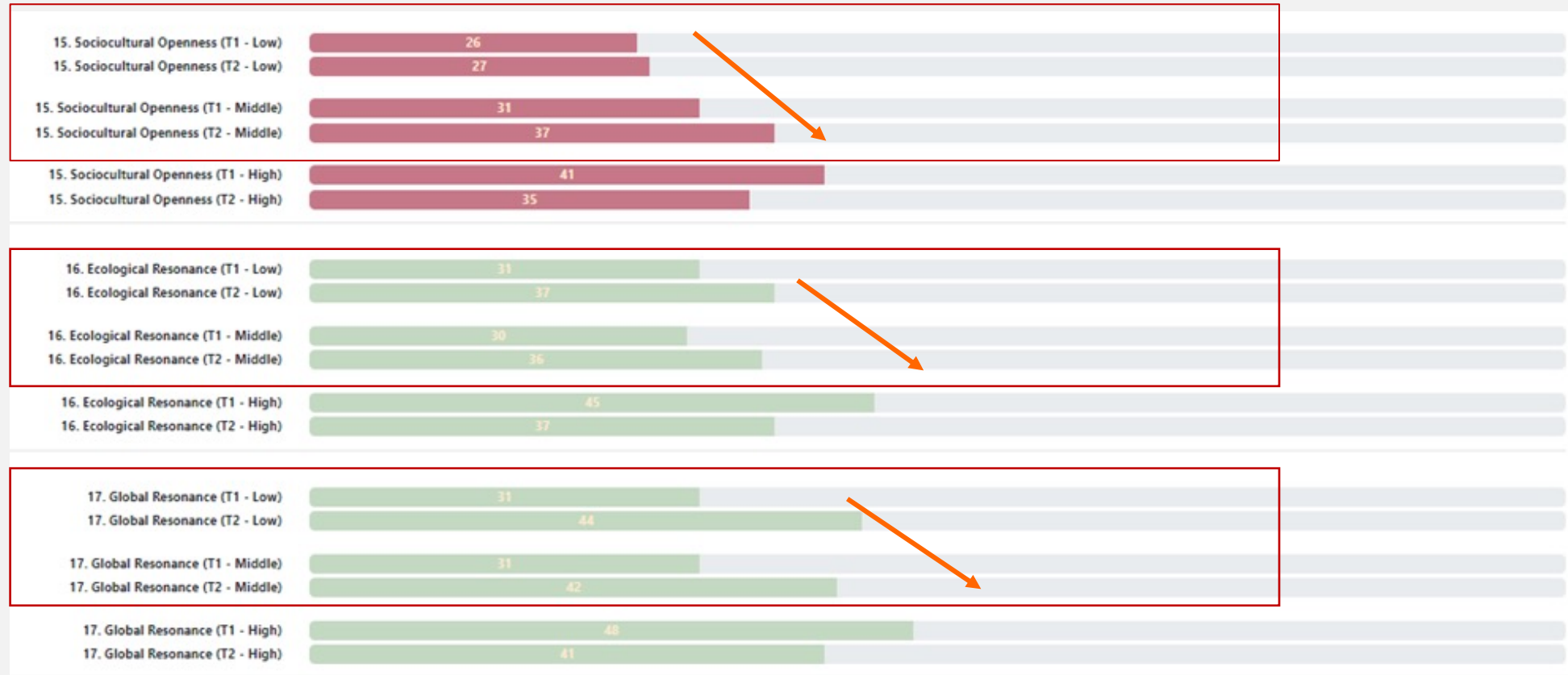


4 BEVIによる分析結果

事前結果が低い層の変容 ③海外経験・滞在期間の長さ

- 海外滞在期間が短い群・中程度の群は、事後の伸びが大きい
- 海外滞在期間が長い群は、事後に数値が低下

(n=39)



5 考察

異文化間教育学会
第44回大会

5 考察 ①海外志向が低い層

- 「全員留学」を掲げる大学において、学生の国際・文化体験への関心は多様であり、**グローバル社会への関与を望まない学生も一定数いる**
⇒BEVIの尺度17.世界との共鳴やその他の尺度の数値を下げた
- 外発的動機（卒業要件、単位のため）**によって、超短期留学を経験する学生がいる
⇒もともと海外志向が高くない学生が、**EI自己が変容するような経験や刺激を多分に受けた**
その結果として事後の伸びが大きい



5 考察 ②海外志向が高い層

- 「海外志向が高く、グローバルな関与を望む学生
 - ⇒超短期の経験では、これまでの価値観はさほど変わらなかった
 - ⇒超短期留学で、**自己省察が促され、数値の低下**が起こった
 - ⇒経験と省察を繰り返し、**学びが生起する経験学習の過程**（Kolb 1984）にあると考えられ、望ましい変容過程と解釈できる



5 考察 ③問いのこたえ

「超短期留学から、transformative learning（自己変容学習）が生起するか？」



- ✓ 超短期留学が、自己変容学習につながる**信念・価値観の変容**をもたらした
- ✓ 超短期留学から、**自己変容学習が生起**するといえる

サブリサーチクエスチョン：

「国際・文化体験への関心が低い学生は、超短期留学によって、どのような学びが起こるのか？」



- ✓ **関心が低いもしくは中程度の学生の方が、もともと関心が高い学生よりも、自己変容学習が促進された**
- ✓ **社会・文化・国際関係に対してオープンになり、環境やグローバル社会への関与を望むようになった**

「全員留学」が、
学生のグローバルな
意識や価値観の
変容に効果をもたらす
学びを生起させた

6 本研究の限界と今後の課題

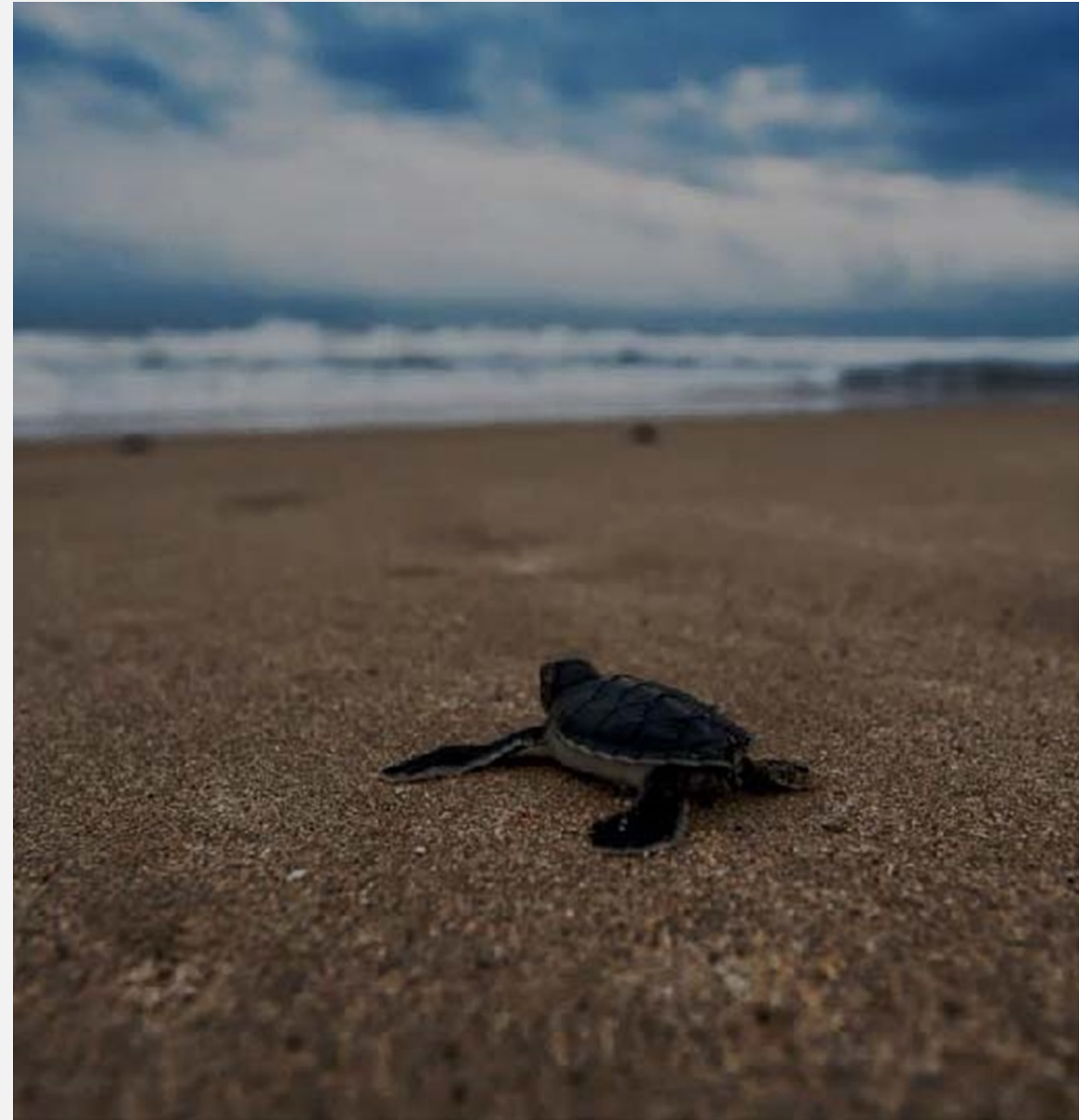
異文化間教育学会
第44回大会

6 本研究の限界と今後の課題

- 客観的測定のためのデータ量
- BEVIの受検者数の少なさ
(事前に受検しても、事後に脱落)

今後の課題

- ✓ 渡航型とオンライン留学の教育的効果の比較
- ✓ 留学プログラム間の比較
- ✓ 留学プログラム担当教員へのBEVI協力への理解促進
- ✓ 学内協力体制の構築



ご清聴ありがとうございました

中村 絵里（千葉大学）

✉ enakamura@chiba-u.jp

🌐 <https://www.ryugaku.chiba-u.jp/inohana/>

本研究は、JSPS科研費（21K10370）の助成を受けて実施しています



参考文献

- ・ 大西好宣 (2019) 短期留学及びその教育効果の研究に関する批判的考察：満足度調査を超えて. JAILA JOURNAL, 5: 51-62.
- ・ 大西好宣・中村絵里・松本暢平・伊藤彰一 (2022) 留学プログラムを通じたグローバル・コンピテンシーの評価手法の検討. 大学教育学会2022課題研究集会要旨集, 122-125
- ・ 永井 敦(2020) BEVIの背景理論III — EIモデルにおける「EI自己」—. 広島大学留学生教育, 24: 19-31.
- ・ 中村絵里 (2021) 日本の高等教育における留学促進とESD受容に関する考察. 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要, 6:115-126
- ・ 中村絵里・大西好宣・松本暢平・伊藤彰一 (2023) 超短期留学を経験した医療系学生の海外志向の変容—全員留学を掲げる千葉大学の事例—. 日本国際教養学会JAILA第11回全国大会発表ポスター.
- ・ 西谷 元 (2020) BEVI-j を用いた留学・学習効果の測定—プログラムの質保証・PDCA・教育的介入—. 2020BEVI秋季トライアルセミナー.
- ・ 日本学生支援機構 (2023) 「2021(令和3)年度 日本人学生留学状況調査結果」
https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2023/02/date2021n.pdf (参照日2023.05.30)
- ・ Kolb, D. (1984) Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development. Prentice-Hall, New Jersey
- ・ OECD (2018) PISA 2018 Global Competence. <https://www.oecd.org/pisa/innovation/global-competence/> (参照日/2023.02.02)
- ・ Shealy, C. (2022) Assessing International, Multicultural, and Transformative Learning: Implications and Applications of the EI Model and BEVI Method for Research and Practice.

【参考資料】 1 7の尺度について

領域	尺度	説明
形成的因子	1. 人生における負の出来事	困難な子ども時代、両親が問題を抱えていた、人生における葛藤/苦悩、多くの後悔など
中核的欲求の充足	2. 欲求の抑圧	不幸な生い立ち/生活史、いさかいの多い/不安定な家族構造、物事が起こる原因・状態の原因に対するステレオタイプな思考/筋が通らない説明
	3. 欲求の充足	経験・欲求・感情に対してオープン、自分・他者・より広い世界に対する気遣い/思いやり
	4. アイデンティティの拡散	アイデンティティの危機、結婚生活/家族生活についての否定的宿命論、自分や将来に対する「否定的な」感情
不均衡の許容	5. 基本的な開放性	基本的な思考、感情、欲求に対してオープンかつ率直
	6. 自分に対する確信	強い意志、困難に対し言い訳することが我慢できない、ポジティブ思考を強調する、深い分析を好まない
批判的思考	7. 基本的な決定論	差異/行動について簡潔な説明を好む、人は変わらない/強者が生き残ると信じている、苦勞の多い生活史
	8. 社会・情動の理解	自己、他者、より広い世界を認識している/オープンである、思慮深く、実用主義、意志が固い、自立の必要性を認める一方で弱者を気遣うなど世界を白黒では捉えない

【参考資料】 17の尺度について

領域	尺度	説明
自己の理解	9. 身体への共鳴	身体的欲求/感情の受容、経験主義、人間性/進化の影響を評価する
	10. 感情の調整	感情に動かされやすい、傷つきやすい、社交的、愛情を求めている、親和的、愛情表現に価値を置く、家族関係が親密
	11. 自己認識	内省的、自己の複雑性を受け入れる、人の経験/状態を気遣う、難しい思考/感情を許容する
	12. 意味の探求	意味を模索する、人生にバランスを求める、耐性がある/根気強い、感受性が高い、弱者への思いやり
他者の理解	13. 宗教的伝統主義	宗教心があつい、自己/行動/出来事を神/霊的な力によるものと考え、 「来世」を信じる
	14. ジェンダー的伝統主義	男性と女性はある型にはまるよう創られている、伝統的/単純なジェンダー観やジェンダーの役割を好む
	15. 社会文化的オープン性	文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである
世界の理解	16. 環境との共鳴	環境/持続可能性の問題に深く関与している。地球/自然界の将来を懸念している。
	17. 世界との共鳴	さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる。